

児童生徒の問題行動に対する 教師の態度に関する研究

第一報告

小川 一夫

I 問題

Tumlirz, O. は、教育心理学を心理学と教育学の両方に關係している一つの限界科学と解して、教育心理学という以上、心理学的事実に重きをおくのは当然であるが、それはあくまで教育的観点という一定の見地から心理学的事実を取扱うべきであると述べている。従つて、その問題のとり上げ方は一般心理学とは全く異つて、教育というはたらきに対して意義のある心的事実だけを選択して問題にしなければならない。しかも教育のはたらきは、成人と成人しつつある者との間の心的關係であるから、教師と生徒との間に成立する心的關係の解明こそ教育心理学の主要な課題であると強く主張している。(1) 然しながら、教育心理学の研究として、教師と児童生徒との相互的な關係を直接とりあげたものは必ずしも多くない。

この研究に於ては、かかる意味から、児童生徒の行動、特に問題行動がどのように教師の態度を規定しているかについて検討し、更には發展的に、教師の態度の如何が児童生徒にどのような影響を及ぼしているかを研究しようとするものである。

II 従來の研究の概況

児童生徒の問題行動について、それがどのように教師の態度を規定しているかの問題は、1928年に發表された Wickman, E. K. (2) (3) の研究以来よく知られているものである。彼の研究は1924年から1926年に亘つて、511名の教師と30名の精神衛生家（精神医学者、心理学者、精神医学的社會事業家）とを対象にしてなされたものであり、児童生徒の50の行動特性* を重大性について20点尺度で兩群に評定させたものである。

その結果から、教師の品等と精神衛生家のそれとが相関 -0.04 を示し、兩群の重大と考える問題行動の種類には大きなずれのあることがわかつた。即ち教師の最も重大視したのは、盗み・不誠実・カンニング・性的問題・不従順・無礼・反抗・癩癩の爆発・凶々しさ・粗野・する休みなどであり、次いで學級での不規律・不注意・作業に対する興味の欠如・軽卒・怠惰・信頼出来ぬことなどが重視され、更に続いては威張ること・注意をひくこと・ひねくれていること・邪魔をすること・おせっかいなどがあげられ、最も重視されない行動は、内気・非社交性・敏感・恐怖心・邪推深いこと・空想的虚言・夢想性などであつた。これを概括するならば、

* ここで取扱われた問題行動は特に異常というべきものでなく、多くは教室に於て普通に見られるものである。

教師の最も重視するのは、不道德・不正直・権威に対する違反であり、最も軽視するのは、退避的・退行的な性格と行動の特徴であり、それらの中間に教室の規律の違反・学業に対する精勵の如何・或いは誇大的・進取的な性格と行動の特徴が位することになる。

処が精神衛生家の品等結果からは、退避的・退行的な性格と行動の特徴が最も重大視され、権威に対する違反や教室の規律の違反が最も軽視された。そしてそれらの中間として、不正直・残酷・癩癩・する休み・或いは不道德・学業上の要求の違反・誇大的な行動の特徴が位置づけられた。

こうした Wickman, E. K. の研究以来、教師は児童生徒の問題行動を正しく解しないとみられて来たのである。

然しながら、その後、Wickman, E. K. の研究に対する色々の批判が、Watson, G. (4), Peck, L. (5), あるいは Klein, D. B. (6) 等によつてなされている。

その第一のものは、Wickman, E. K. の教示が教師と精神衛生家とで異なるという点に向けられた。教師に対しては、学級管理に於て起つた行動特性の度合に基づいて評定することを要求している。換言すれば、教師の取扱い上困る問題としての教示を与えている。しかるに精神衛生家のグループに対しては、当該問題行動が子供の将来に影響を及ぼすことの重大さを基準として評定するよう教示がしくまれている。このように両群に対する教示に差異があるのを無視して、Wickman, E. K. は両者の結果がいかに同一基準によつているかの如く取扱つているというのである。

批判の第二のものは、応答に際して被調査者に与えられた時間差の問題である。即ち、教師には出来るだけ早くすると時間制限で品等づけを命じておきながら、精神衛生家に対しては、格別時間の制限をしないで自由に評定を課しているというのである。

これらの方法上の欠陥については、実は Wickman, E. K. (7) 自身も認めているわけで、彼は「①教師への教示は、現実の問題行動に対する反応を得るようにしくまれた。その結果、現在の問題行動が子供の将来に及ぼす影響ということは(おそらく必然的に意味されるにも拘らず)明確にとりあげられなかつた。これに反して、精神衛生家には当該問題行動が将来子供の生活に及ぼす影響という観点からの評定を課した。②教師に対しては、当該問題行動の困難さ、厄介さの度合が強張されたが、これによつて教師がその問題にはらつている注意の量や、その矯正につくしている努力の程度が示されるであろうということが假定されたからである。然し精神衛生家には、その行動のもたらす厄介さよりもむしろ、当該問題行動の重大さの概念が強張された。③又時間制限については、教師から合理化されない最初の反応を引出そうとしたためである。精神衛生家に対しては、知的な評価を求めようとしたため別に制限を課さなかつた。」と述べている。* 即ち両群に対するこの手続上の差異は、Wickman, E. K. が教師からは出来るだけ児童生徒の問題行動に対する現実的な態度を引出そうとし、精神衛生家からは知的な

* この点が生後の Wickman の結果の引用に無視されがちであることは注意を要すると思う。

判断を引出すように努力した結果生じたものであることが理解される。*

Wickman, E. K. の研究に対する批判と共に、数多くの検証も試みられている。例えば、Ellis, D. B. & Miller, L. W. (8) は教示を Wickman, E. K. が精神衛生家に与えたものに統一して、これを追試し、教師と精神衛生家との間に 0.49 の相関を得ている。このように両者の相関が高く現れたということは、教師群の側に起つた観点変更のためか、或いはしばしば問題にされて来た教示を統一したためであるかは勿論早急に決め難い。又別に、Mitchell, J. C. (9) も両群の教示を統一して、教師と精神衛生家との間に 0.70 というかなり高い相関を得ている。而して彼は 1928 年の Wickman, E. K. の教師と 1940 年の自分の精神衛生家との間に 0.21 の低い相関をみたことから、そこには精神衛生家の意見といえども変化の可能なことが多少意味されてはいるが、** それ以上に Wickman, E. K. の研究では教示の差が大きく影響していると推定している。

最近にあつては、Sparks, J. N. (11) が Wickman, E. K. の研究の批判から出発して、

①教師は自分の取扱いにくい問題を子供の将来に有害なものと考えたのではないだろうか。

②古い研究の結果が今日の教師にも妥当するだろうか。

③教育の程度と教職経験年数とが問題行動に対する教師の態度に関係するだろうか。

などの諸問題を研究する目的から、Wickman, E. K. のあげた問題行動をそのまま Form I と Form II にくみ、前者に於ては、子供の将来の適応の観点から、後者にあつては、現実の取扱い上の観点から、それぞれその重大さを五段階に品等づけさせることを小学校教師 762 名について試みている。対象の半数 381 名に Form I を、残り 381 名に Form II を評定させた*** 結果、両形式間の列位相関 $\rho=0.05$ を得、而も Form I の品等平均が II よりも 0.78 高いということを経ている。そしてこのことから、教師は問題行動を二組の教示下で夫々別々に品等づけたことと、当該問題行動は現実の取扱いの厄介さより以上に重大性をもつとして一般に考えていることが考察されたが、更に Form I の結果を詳細に検討して、教師達が子供の将来に最も有害だと考えているのは、児童の個人的適応に関するものでなくして、社会的・道徳的規範を犯すことに関連したものであること、即ち教師のみ方は依然として精神衛生家のそれと同じでないと論じている。又両形式の結果を考察して、教育の程度は、児童の問題行動を将来に関する重大さの点でみる場合、教師の態度に多少の差をもたらす**** が、教職経験年

* 教示や時間制限を統一して精神衛生家と両親とのグループに、Wickman 式の調査を実施した Stogdill の研究 (Stogdill, R. M.: Parental Attitudes and Mental Hygiene Standards. Mental Hygiene, 1931, 15, pp. 813-827.) 結果でも、やはり両群間に著しい差が現れている。

** Klein, D. B. (10) が、項目によつては精神衛生家といえども大きなずれのあるということを経、Stogdill と Wickman の両精神衛生家群の結果を比較することにより指摘している。

*** Form I に於て 190, Form II に於て 195 の回収 (50.5% の回収率) を得ている。

**** Bachelor の学位以上と以下との比較から、前者が有意に重大と品等づけたものに、盗み・不正直・性的不行為があげられた。

数は殆んど影響を示さなかつたと報告している。

なお、24年前に実施された Wickman, E. K. の研究方法をそのまま踏襲して、その間に於ける教師の問題行動に対する態度の発達を Schrupp, M. H. & Gjerde, C. M. (12) が研究している。しばしば問題視されて来た教師と精神衛生家との教示差によつて、直接には両群の結果を比較することが不可能であることを前提としながらも、小中学校の教師 199 名 * と精神衛生家 37 名とに対し、50 の問題行動を 0~20 の品等尺度で評定させている。その結果から

①精神衛生家の評定は、1928 年 (Wickman), 1940 (Mitchell) の精神衛生家のものと極めて高い一致を示した。(r=0.80~0.88)

②教師と精神衛生家との平均品等が、1928 年の Wickman, E. K. の研究では無相関であつた (r=-0.04) のに、1951 年では高い相関を示した (r=0.56)。

③一群で最も重大とする 10 の特性の中に、他群が最も重大でないとするものは全然なかつた (Wickman の研究では 5 特性あつたのに)。

④両群の不一致の広がり方が 1951 年の場合には 1927 年より小であつた。

⑤このように明らかに、教師の態度に進歩が見られるけれども、よく検討してみると、1951 年のものでもやはり教師の態度は精神衛生家のそれと一致しているのではなく、Wickman, E. K. の指摘したと同様に、退避的な行動への関心が少く、秩序・道徳の違反に関する行動への関心が大きいという傾向がうかがえる。

以上のような結論づけを行つて、かかる Wickman 流の研究が決して無意味でなかつたと結んでいる。

我が国に於ける研究のうちには、Wickman 式のものは殊んど見当たらないが、葛谷(13)は熊本県下の小中高の教師 300 名を対象にして、大人からみて目立つ行為が重視され、目立たぬものが等閑視される傾向が強いのではないかということを検証する目的から、「児童生徒の問題行動の中で最も重要なものと考えられるものは何か。日常経験されている事で特に強く感じて居られる事柄三つを具体的にあげて下さい」との教示の下に質問紙調査を実施している。これは Wickman, E. K. が問題行動のリストを作製するために、予備調査として、教授経験に於て遭遇した行動上のあらゆる種類の問題を教師に列挙させているものに相当する研究と云えよう。この結果

①教師の重視する児童生徒の問題行動の種類は、小学校が最も多く、中学校がこれに次ぎ、高校が最も少いこと。

②教師の重視する問題行動は反社会的・非道徳的な進取的問題行動であつて、上級学校程学習上の問題が重視される傾向がうかがえる。

③退行的な人格性特質についての重視の度合が極めて軽いこと。

* うち 127 を回収 (回収率 63.8%)、実際に資料として利用出来たのは 119 (59.8%) であり、小学校教師 59 と中学校 60 であつた。

④地域別の特質としては、特に山間部の教師に於て学習上の問題行動が小中学に共通して最大関心事となつている。

以上の諸点を明らかにしている。Wickman, E. K. 以来云われている教師の問題行動に対する態度が、我が国の教師についてもうかがえるようである。

Ⅲ 本研究の方法

A. 調査問題

Wickman, E. K. 以来しばしば用いられて来た 50 の問題行動の項目 (Table 1) を使用した。*

Table 1 問題行動 **

問題行動	順位	問題行動	順位
1 私語 (こそこそ話)		26 かんしやく	
2 差出口する		27 盗 癖	
3 せんさく好き		28 空想にふける	
4 喫 煙		29 怒りつばい	
5 瀆 神		30 学校の物をこわす	
6 非社会的 (引込じあん)		31 仕事に不注意 (粗略)	
7 幸福でない (抑圧)		32 ノート絵などが卑猥	
8 残酷 (弱い者いじめ)		33 不 従 順	
9 臆 病		34 つくりごと (想像的嘘言)	
10 疑 深 い		35 喧嘩好き	
11 むだ口多し (おしゃべり)		36 怠慢 (ずる休み)	
12 乱暴 (放逸)		37 過 敏	
13 自瀆行為		38 遺尿症	
14 愚 鈍		39 横 柄	
15 頑固強情		40 無責任 (あてにならぬ)	
16 暗示にかり易い		41 生意気 (反抗)	
17 神 経 質		42 不 注 意	
18 すぐ落胆する		43 不 精	
19 内気 (はにかみ)		44 利己主義	
20 他人の非をうちたがる		45 異性くさい行動	
21 厚顔無恥		46 身体に基づく臆病	
22 落ち着きがない (そわそわ)		47 す ね る	
23 軽卒 (かるはずみ)		48 仕事に興味を欠く	
24 ぐずつたれ		49 不 正 直	
25 外観だらしない		50 瞞 す	

B. 調査の方法

同一の調査用紙二枚を夫々形式 I 及び形式 II と決め、各々次の手順によつて評定させた。

* 45 「異性くさい行動」は Wickman のものでは、「性的不行跡」となつている。準備の手違いからこのようになった。

** 調査用紙では問題行動に番号が附してない。説明の便宜上番号をここで附した。

(Iが完全に終了後 II を実施)

形式I, 教示: 児童生徒の将来の適応に重大な影響を及ぼすと思われる順に50の問題行動を列べてみよ。①先ず重大さの程度に応じて5段階に品等づける(カード使用)。②各段階ごとに、その内部で順位づけをする(カードによる一対比較)。③1~50までの順位を用紙の相当欄に記入する。

形式II, 教示: 次の50の問題行動について、その取扱い(発見ではない)に厄介と思うものから順位づけをせよ。①先ずその厄介さに応じて5段階に品等づける(カード使用)。②各段階の内部で順位づけをする(カードによる一対比較)。③1~50までの順位を相当欄に記入する。

C. 被調査者及び調査時期

調査はTable 2. に示す如く、昭和28年7月~8月に於て島根県下三地区の教師に実施した。*

Table 2 調査地区・時期・被調査者

調査地区	調査時期	被調査者		
		男	女	計
邑智郡川本地区	昭.28.7.25	47	34	81
益田地区	昭.28.8.3	48	24	72
松江地区	昭.28.8.8	53	72	125
計		148	130	278 **

被調査者の校種別の内訳はTable 3のようであり、又年齢は最低18才最高57才に及び(Table 4), 勤務年数は4ヶ月から33年にわたつた。

Table 3 校種別性別被調査者

校種 性別	幼稚園	小学校	中学校	高校	計
	男	0	75	46	27
女	6	92	16	16	130
計	6	167	62	43	278

Table 4 年齢別性別被調査者

年齢 性別	20 以下	21 ~ 25	26 ~ 30	31 ~ 35	36 ~ 40	41 ~ 45	46 ~ 50	51 ~ 55	56 以上	計
	男	2	38	40	24	12	20	7	3	2
女	3	51	45	13	11	7	0	0	0	130
計	5	89	85	37	23	27	7	3	2	278

D. 整理の方法

色々の整理のし方が考えられるが、一応次の方法を採用した。最初の5項目即ち順位第1位~第5位までと、最後の5項目即ち順位第46位~第50位までをとりあげる。而して前者に該当する項目に夫々+1を、後者に相当するものに各々-1を与える。かくして項目ごとに得点の

* 夏期認定講習の機会を利用して、教育心理学の受講者に実施した。被調査者は十分に動機づけられ、極めて熱心にこの調査を受けた。なお解答に要した時間は、一つの形式に於て大体30分~40分であつた。

** 資料記入不備のため1名が除外された。

計を求め、それによつて項目の列位を決定する。*

従つて本研究に於ける方法上の特性は次のように云うことが出来よう。基本的にはWickmanの様式をとり、問題行動も同じものを用いたけれども、所謂「教示差」を統一する立場をとつた。即ち Sparks, J. N. (14) の手続に準じて、教示を明確に区別した二つの形式を用いた。然し彼が夫々の形式を別々の教師に課しているのと異り、同じ被調査に両形式を与へたし、評定の様式もそれらと異り、先ず 50 の項目を 5 段階に、次いで各段階ごとに一対比較法で順位をつけさせた。又処理に於ても判断の曖昧と推定されるものを除いて上位の 5 項目と下位の 5 項目だけを取りあげた。

Ⅲ 結果および考察

この報告に於ては、被調査者を性別・校種別に整理して考察したもののみを取りあげる。

A. 形式 I と形式 II の相関

形式 I は、児童生徒の将来の適応の観点から問題行動を順位づけるものであり、形式 II は、その取扱いの困難さの点から順位を決定するものであることは既に述べて来た通りであるが、先ず主要な問題仮説となるものは、「教師は児童生徒の問題行動を自分の取扱いの難易の観点から評価するのではないだろうか」ということである。而してこのことは、形式 II の調査が教師に現実的な判断を求めていることから考えて、形式 I と II の相関を求め、それが高ければ、およそ上述の仮説が認められると思考される。

そこで以上の推論から、①先ず被調査者を性別・校種別に区分し、夫々両形式の列位を既述の整理法に基いて求めた。②かくして求められた両形式の列位をもとにして、列位差法による相関係数を算出した。その結果が Table 5 に示すものである。

Table 5 形式 I と形式 II の相関 **

被 調 査 者	N	ρ	被 調 査 者	N	ρ
全 員	278	0.80	男 × 小 学 校	75	0.68
男	148	0.79	男 × 中 学 校	46	0.81
女	130	0.76	男 × 高 校	27	0.65
幼 稚 園	6	—	女 × 幼 稚 園	6	—
小 学 校	167	0.75	女 × 小 学 校	92	0.73
中 学 校	62	0.78	女 × 中 学 校	16	0.56
高 校	43	0.64	女 × 高 校	16	0.58

* この整理方法には幾多の問題が残されるけれども、① 50 項目の順位づけの結果に於ては、形式 I では極めて重大なものと、大して重大でないもの、形式 II では極めて厄介なもの、大して厄介でないもの、即ち順位の最初の方にあげられるものと、最後の方に相当するものは可成り明確に判定づけられるが、中間はその判断が不明確で資料としての信頼度が低いと推定される（内省報告によつて検討した）。② しかも、その最初の 5 項目或いは最後の 5 項目といへども、順位 1、2、3、4、5、又は順位 46、47、48、49、50 と明確に順位づけられるものでもなからう。③ この調査の目的が、順位決定よりはむしろ、主として教師がそれぞれの観点から重視するもの傾向を知ろうとするにある。以上の理由からして、かかる整理方法を一応採用した。

** 幼=幼女は N=6 のため ρ を求めず。(以下の処理に於ても除外する)

この結果から考察されることは、中学校女教師と高校女教師の相関のみが5%の危険率で有意な相関と云える以外は、全て1%の危険率で有意な相関を示している。これは、本調査の範囲内に於て、教師が第Ⅰの形式と第Ⅱ形式とを明確に区別げないで判断していること、敢えて云うならば、教師達が児童生徒の問題行動の重大さを、とかく日頃の現実の取扱いの難易度に応じて評価しがちであることが意味されていると推定出来る。既に従来の研究を概説した際にふれた如く、Sparks, J. N. の結果では教師の両形式間の相関は0に近く、現実的態度と知性的態度とが区別げられていて、本研究の結果と異なるが、これは被験者そのものの根本的な違いがあるということは勿論のこと、方法論的にみても同一教師に両形式が継時的に課される

Table 6 形式Ⅰと形式Ⅱの上位と下位の項目

順位	全 員		男				女			
	形式Ⅰ 項目	形式Ⅱ 項目	形式Ⅰ 項目	形式Ⅱ 項目	形式Ⅰ 項目	形式Ⅱ 項目	形式Ⅰ 項目	形式Ⅱ 項目	形式Ⅰ 項目	形式Ⅱ 項目
1	盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖	(1) 盗癖
2	不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直	(2) 不正直
3	無責任	(10) 瞞す	(4) 無責任	(8.5) 瞞す	(4) 無責任	(10.5) 頑固強情	(23.5) 頑固強情	(23.5) 頑固強情	(23.5) 頑固強情	(23.5) 頑固強情
4	瞞す	(3) 頑固強情	(18) 瞞す	(3) 頑固強情	(15.5) 瞞す	(5) つくりごと	(8.5) つくりごと	(8.5) つくりごと	(8.5) つくりごと	(8.5) つくりごと
5	怠慢	(13) つくりごと	(8) 怠慢	(13) 愚鈍	(13.5) 利己主義	(20) 瞞す	(4) 瞞す	(4) 瞞す	(4) 瞞す	(4) 瞞す
6	利己主義	(12) 愚鈍	(14.5) つくりごと	(11) 利己主義	(7) 残酷	(16) 生意気	(12) 生意気	(12) 生意気	(12) 生意気	(12) 生意気
7	残酷	(15) 不従順	(10) 利己主義	(6) 神経質	(29) 怠慢	(10.5) 不従順				
8	つくりごと	(5) 神経質	(33) 残酷	(15) 幸福でない	(19) 乱暴	(13.5) 愚鈍	(20) 愚鈍	(20) 愚鈍	(20) 愚鈍	(20) 愚鈍
9	乱暴	(17) 生意気	(19) 乱暴	(20) 無責任	(3) つくりごと	(4) 自演行為	(18.5) 自演行為	(18.5) 自演行為	(18.5) 自演行為	(18.5) 自演行為
10	不従順	(7) 無責任	(3) 仕事に興味を欠く	(22) 不従順	(11) 非社会的 不従順	(7) 怠慢 無責任				
...
41	身体に基づく臆病	(26) 過敏	(44) 異性くさい行動過敏	(38.5) 差出口する	(39) 身体に基づく臆病	(23) 潰神	(40.5) 潰神	(40.5) 潰神	(40.5) 潰神	(40.5) 潰神
42	不精	(43) 暗示にかかり易い	(29) 身体に基づく臆病	(29.5) 不精	(45) 差出口する	(39) ノート 絵など卑猥				
43	せんさく好き	(39) 不精	(42) せんさく好き	(40) 喫煙	(38) せんさく好き	(38) 不精	(35) 不精	(35) 不精	(35) 不精	(35) 不精
44	過敏	(41) 差出口する ノート絵 などが卑猥	(40) 内気	(23) 暗示にかかり易い	(35) 過敏	(44) 過敏	(44) 過敏	(44) 過敏	(44) 過敏	(44) 過敏
45	内気	(29.5) 差出口する ノート絵 などが卑猥	(39) 不精	(42) むだ口多し	(47) 外観だらしない	(50) 差出口する	(42) 差出口する	(42) 差出口する	(42) 差出口する	(42) 差出口する
46	外観だらしない	(49) 学校の物をこわす	(32) 外観だらしない	(49) 学校の物をこわす	(30) 遺尿症	(38) 学校の物をこわす	(33) 学校の物をこわす	(33) 学校の物をこわす	(33) 学校の物をこわす	(33) 学校の物をこわす
47	むだ口多し	(47) むだ口多し	(47) むだ口多し	(45.5) ノート 絵などが卑猥	(37) 内気	(40) 空想にふける	(49) 空想にふける	(49) 空想にふける	(49) 空想にふける	(49) 空想にふける
48	遺尿症	(31.5) 空想にふける	(49) 空想にふける	(48) 空想にふける	(48) むだ口多し	(48) むだ口多し	(48) むだ口多し	(48) むだ口多し	(48) むだ口多し	(48) むだ口多し
49	空想にふける	(48) 外観だらしない	(46) 遺尿症	(25.5) 外観だらしない	(46) 空想にふける	(47) 私語	(50) 私語	(50) 私語	(50) 私語	(50) 私語
50	私語	(50) 私語	(50) 私語	(50) 私語	(50) 私語	(49) 外観だらしない	(45) 外観だらしない	(45) 外観だらしない	(45) 外観だらしない	(45) 外観だらしない

より厳密な方法をここで採用したということが影響しているかも知れない。

形式ⅠとⅡの列位がかなり高い一致度を示すことは、具体的には両形式の上位10項目と下位10項目とを夫々抽出した Table 6 によつても考察することが出来る。然しこの表をみていると、相関係数では著しく一致していても、項目によつては両形式間にかなりのずれを示すものあることを推察するに難くない。即ち50の問題行動の項目のうち、多くのものは両形式間に於てかなりの一致を示すにもかかわらず、ある項目はかなり大きい評定差をもつかも知れないのである。従つて一体具体的にはどのような問題行動に於てそれが云えるかを次に検討してみよう。

B. 形式ⅠとⅡの順位の比較——ずれの大きい項目

総括的にはAで考察したように、一応教師は取扱いの難易の観点から児童生徒の問題行動の重大さを判断する（現実的態度で知性的態度が決定され勝ちである）としても、詳細に両形式の得られた列位を見るならば、項目によつてはかなり大きいずれを持つものが含まれているわけである。

先ずここで問題になるのは、ずれの大きさを決める基準のとり方であるが、一応標準偏差値（S・D）を求め、これを基とした。即ち形式Ⅰと形式Ⅱの列位差（相関を算出する際求められている）のS・Dを求め（Table 7）* これを基準として比較的ずれの大きいものを次の様式で区分することとした。

① まず、 $I < II$ ……形式Ⅰに於て、形式Ⅱに於けるよりも比較的重視されているもの。

Table 7
両形式の列位差のS・D.

被 調 査 者	S・D
全 員	9.11
男	9.42
女	9.97
小 学 校	10.23
中 学 校	9.47
高 校	12.19
男 × 小 学 校	11.51
男 × 中 学 校	9.00
男 × 高 校	12.09
女 × 小 学 校	10.61
女 × 中 学 校	13.55
女 × 高 校	13.15

$I > II$ ……形式Ⅱに於て、形式Ⅰに於けるよりも比較的
重視されているもの、とする。

② 以上の各々に於て、

1 S・D. ~ 2 S・D. ……ややずれの大きいもの

2 S・D. ~ 3 S・D. ……かなりずれの大きいもの

3 S・D以上 ……極めてずれの大きいもの、と決める。

かかる手順で、ずれの比較的大きいものを抽出してみると、性別では Table 8 に示すようにまとめられた。

かなりずれの大きいもの以上（2S・D.以上）についてまとめてみると、 $I < II$ 即ち現実の取扱いの困難以上に、将来の適応に重大な影響を及ぼすと教師の判断するものは、全員の「仕事に不注意（粗畧）」（16 < 34.5）** だけ

であるのに反し、 $I > II$ 即ち形式Ⅱの現実の取扱いに於てより重大視されるものは、全員、男女を通じての「神経質」（33 > 8, 29 > 7, 36 > 13.5）、男教師の「内気」（44 > 23）、「遺尿症」

* 実際には列位の差の総計は0となる。従つて $S・D. = \sqrt{\frac{\sum(X-\bar{X})^2}{N}} = \sqrt{\frac{\sum X^2}{N}}$ となる。

** () 内の数字は両形式の列位を示す。

Table 8 兩形式の順位の比較
—すれの大きい項目—*

I < II			I > II		
全員	男	女	全員	男	女
		8		7	7
	12		9	9	9
16		16			14
20		20	15	15	(15)
23		23	(17)	(17)	(17)
30	30	30	19	(19)	
(31)	31	31	24		(24)
	32		38	(38)	
	35		41		
42	42		46	46	46
		44	47	(47)	47
48	48	48			

(49>25.5), 「すねる」(32.5>12), 又女教師の「頑固強情」(23.5>3), 「ぐずつたれ」(38>18) と多くの項目をあげる事が出来る。

又校種別にすれの大きいものをまとめてみると, Table 9 のようになり, 依然として, 将来の問題として一層重視されるもの(I<II)は少く, 中学校教師の「落ち着きがない」(19<40)及び高校教師の「疑深い」(12<39)にすぎない。これに反して取扱いに, より困難を訴えるもの(I>II)の方はかなり多く, 小学校及び高校の「神経質」(31.5>9, 40.5

Table 9 兩形式の順位の比較
—すれの大きい項目—

I < II			I > II		
小学校	中学校	高校	小学校	中学校	高校
	5			3	
8	8			4	
		(10)			5
12				7	
16				(9)	
		18	13		13
			(14)		
	(22)		15	15	
	23		(17)		(17)
		29	(19)		
30	30	30	24	24	
31	31				37
	35		38	(38)	
39			41	41	41
40			46	46	
	42	42	(47)		
48	48				

Table 10 兩形式の順位の比較
—すれの大きい項目—

I < II			I > II			I < II			I > II		
男×小	男×中	男×高	男×小	男×中	男×高	女×小	女×中	女×高	女×小	女×中	女×高
	5					2		7			3
8						8	8				4
		(10)									5
12			10	10		12					7
	13					11	16				9
		18	13			13					10
	22			(14)				21			
	23					15		22		15	(15)
30		30	(17)			17	23	23		17	(17)
31	31		(19)	19			25			19	
				24			26		(24)		
35	35		37				29				33
	36		(38)	(38)			30				34
39		39			(41)	31				38	
40				46	46			32			39
	42	(42)	(47)		47			39			41
							40	40			43
						44	44	44			45
							45	45			46
						48			(47)		46

* 数字は項目番号を示す (Table 1 参照) 又○はかなりすれの大きいもの(2S.D.~3S.D.)

[]は極めてすれの大きいもの(3S.D以上)をいみする。(以下Table 10まで同様)

>4), 小学校の場合の「内気」(45>22.5)及び「すねる」(33>10.5), 中学校の場合の「愚鈍」(37.5>11)と「遺尿症」(49>27), 更に高校に於ける「臆病」(33>6)を数えることが出来る。

更に細かく, 性別・校種別考察を Table 10 について試みると, 男教師のⅠ<Ⅱの場合, 僅に高校の「疑深い」(10.5<46.5)と「不注意」(14.5<40)であるが, Ⅰ>Ⅱの場合は小中を通じての「遺尿症」(49>21, 49>21.5)が目立ち, 特に中学校に於ては極めてすれの大きい部類に属する。その他小学校に於ける「神経質」(32>6), 「内気」(44.5>13), 「すねる」(35>9.5), 中学校に於ける「愚鈍」(31>13), 更には高校に於ける「臆病」(27.5>3), 「生意気」(35.5>9)をあげることが出来る。

女教師にあつてはⅠ<Ⅱの方では全く無く, Ⅰ>Ⅱの場合, 小学校での「ぐずつたれ」(40.5>16.5), 「すねる」(32>9.5), 中学校での「愚鈍」(42>10)と「頑固強情」(33.5>5), 最後に高校での「潰神」(41>10)と「神経質」(48>4.5)をとりあげうる。

かくの如く, 相関係数の上では形式ⅠとⅡの間に大きな一致を認め得ることから, 恐らく教師は現実問題としての取扱いの困難さに基づいて, 児童生徒の問題行動を評価するだろうと云つても, 項目ごとに両形式のすれを検討して行くと, 項目によつてはかなりすれの大きいものをいくつか抽出することが出来た。

そうしてこの分析的結果から気付くことは,

①性別・校種別の分析を通じて, かなりすれの大きいもの及び極めてすれの大きいものは, Ⅰ<Ⅱの場合が僅に5項目であるのに対して, Ⅰ>Ⅱの方は実に29項目の多くにのぼつてゐることである。

②而も, Ⅰ>Ⅱの場合にあつては, より重大視された形式Ⅱの項目の約 $\frac{3}{4}$ (29のうち21までも)が, 全列位の約 $\frac{3}{4}$ (列位第13位以内)に入つてゐる。即ちすれの大きいものは取扱いが著しく困難と評定されている行動特性に多いということが判る。このことが如何なる心理的な理由によるものであるかを, すぐにこれだけの資料から断ずるのは無理であつて, 今後の発展課題として追求すべきものであろう。或いは教師達にとつては第Ⅱ形式の判断が現実の問題であるだけに, 容易に且つ思い切つて評定出来たということによるのかも知れない。

③教師達の評定結果で両形式間にすれの大きいものはⅠ>Ⅱの場合に多いが, それらを見ると, かなり多くの児童生徒の個人的な適応に関するものが含まれているのは次に考察する精神衛生家達の態度と相通するものを感じるが, 現実的な取扱上の面だけに止つて, 知的な態度に現われていないことが問題とならう。

なお Sparks, J. N. (11) は両形式を夫々5段階に品等づけさせた結果, 形式Ⅰの平均品等がⅡのそれより0.78高かつたということから, それは教師達はその問題を取扱いの困難以上により重大であると一般に考えたためであると述べているが, この研究では相対的な順位づけを教示したため, その辺の事情を確かめることが出来ない。むしろ逆に教師達は取扱いの困難性の方を重くみてゐるのではないかということが予想される。

C. 教師の態度と精神衛生家の態度との比較

Wickman, E. K. の研究以来よく云われて来たことは教師が児童生徒の内向的・退避的な行動特性にあまり関心を示さないで、むしろ社会的・道徳的規範により、現実的な取扱いに基づいて問題行動の重大さを評定しがちであるという点であつた。既に考察した如く、確かに両形式間の相関が高く、おそらく現実的な管理上の問題が知的な判断に大きく働いていると推察されたわけであるが、更に Wickman 流に教師の評定と精神衛生家のそれとのずれを考察することによつて、教師の態度の特質を把握したいと思う。

然し本研究に於ては、教師に対する調査のみで、精神衛生家に対して評定を求めているので、一応それに代るものとして米国での研究結果を借用しよう。

精神衛生家に対して Wickman 式の問題項目の評定を求めたものに、1928年の Wickman, E. K. (2)の研究、1940年の Mitchell, J. C. (9)の研究、1951年の Schrupp, M. H. & Gjerde, C. M. (12)の研究があるが、その三群間には0.80~0.88という高い相関が示されている(15)。対象を異にしても精神衛生家の見解には殆んど一貫した問題行動に対するみ方があることをうかがいうる。そしてここではそのうちの1928年と1951年の結果を基準としてとりあげてみよう。

先ず1928年の Wickman, E. K. の対象となつた精神衛生家の列位の上位10項目と下位10項目とを摘出すると、Table 11の如くであり、又別の1951年に於ける Schrupp, M. H. & Gjerde, C. M. の研究対象である精神衛生家のそれをあげると、Table 12の通りである。

Table 11 1928年の精神衛生家の評定 *

列位	項 目	列位	項 目
1	非社会的 (引込じあん) (1)	41	不 従 順 (33)
2	疑 深 い (5)		自 瀆 行 為 (43)
3	幸福でない (抑圧) (2)	43	落ち着きがない (そわそわ) (39)
4	怒りつばい (14)	44	ぐずつたれ (37)
5	臆 病 (4)	45	せんさく好き (48)
6	残酷 (弱い者いじめ) (3)	46	学校の物をこわす (15)
7	すぐ落胆する (8)	47	乱暴 (放逸) (44)
8	暗示にかかり易い (6)	48	瀆 神 (46)
9	他人の非をうちたがる (10)	49	差出口する (41)
10	過 敏 (16.5)	50	喫 煙 (47)
			私語 (こそこそ話) (50)

* () 内の数字は当該項目の1951年の精神衛生家の評定した Rank を示す。

Table 12 1951年の精神衛生家の評定 **

列位	項目	列位	項目
1	非社交的 (引込じあん) (1)	41.5	頑固強情 (20)
2	幸福でない (抑 圧) (3)		愚 鈍 (30)
3	残酷 (弱い者いじめ) (6)	43	自瀆行為 (41)
4	臆 病 (5)	44	乱暴 (放逸) (46)
5	疑 深 い (2)	45	むだ口多し(おしやべり)(28.5)
6	暗示にかかり易い (8)	46	瀆 神 (47)
7	神 經 質 (18.5)	47	喫 煙 (49)
8	すぐ落胆する (7)	48	せんさく好き (44)
9	内気 (はにかみ) (13.5)	49	差出口する (48)
10	他人の非をうちたがる (9)	50	私語 (こそこそ話) (50)

而してこれらの基準と本調査の形式Iの結果とを比較して、一群が最も重大であるとみて上位の10項目にあげ同時に他群が重大でないとして下位の10項目に指摘しているものを選出しみると、Table 13 のようになった。

Table 13 精神衛生家の評定と形式 I との間でずれの大きい項目

精神衛生家	全 員	男	女	小 学 校	中 学 校	高 校
1951年	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+
	内気(はにかみ)	内気(はにかみ)	内気(はにかみ)	内気(はにかみ)	内気(はにかみ)	愚 鈍 + 内気(はにかみ) 神 經 質
1927年	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+
	不従順 + 過 敏	過 敏				

精神衛生家	男×小学校	男×中学校	男×高 校	女×小学校	女×中学校	女×高 校
1951年	愚 鈍 +	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	愚 鈍 + 幸福でない (抑 圧) 臆 病 神 經 質 内気(はにかみ)
	内気(はにかみ)	内気(はにかみ)		内気(はにかみ)	内気(はにかみ)	
1927年		乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	乱暴(放逸)+	幸福でない (抑 圧) 臆 病 過 敏
	過 敏	過 敏		過 敏	過 敏	

+ …… 教師重視し精神衛生家の軽視するもの。
 印なし …… 逆に精神衛生家の重視し教師の軽視するもの。

** () 内の数字は1928年の精神衛生家の評定した Rank を示す。

これから考察されることは、教師は重視するが、精神衛生家は軽視するものとして、「乱暴(放逸)」、「不従順」といつた権威に対する違反に類するものが、殆んどの群にみられ、「愚鈍」が一部にうかがえる。又その逆に精神衛生家達は重視するが教師のあまり重視しないものとしては、「内気(はにかみ)」、「過敏」といつた退避的な性格が多く群にみられ、一部高校女教師に於ては、「幸福でない(抑圧)」、「臆病」、「神経質」が指摘されて、この群は他群に比べ精神衛生家の態度と最も大きなずれが感ぜられる。

以上のことから判るように、教師は学級管理を乱す進取的な行動、又は学習の進捗に支障を

Table 14 精神衛生家の評定と形式 I との間で比較的一致する項目

精神衛生家	全 員	男	女	小 学 校	中 学 校	高 校
1951年	残 酷 + むだ口多し (おしやべり) せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + むだ口多し (おしやべり) せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + 非社会的(引 込じあん) + むだ口多し (おしやべり) せんさく好き 私語 (こそこそ話) 差出口する	残 酷 + 非社会的(引 込じあん) + むだ口多し せんさく好き 私語 (こそこそ話) 差出口する	残 酷 + むだ口多し せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + むだ口多し 私語 (こそこそ話) 自瀆行為 喫 煙
1927年	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + 非社会的(引 込じあん) + せんさく好き 私語 (こそこそ話) 差出口する 瀆 神	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話) 差出口する	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + 私語 (こそこそ話) 喫 煙 自瀆行為

精神衛生家	男×小学校	男×中学校	男×高 校	女×小学校	女×中学校	女×高 校
1951年	残 酷 + むだ口多し せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + むだ口多し せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + 疑 深 い + むだ口多し 私語 (こそこそ話) 差出口する 自瀆行為 喫 煙	残 酷 + 非社会的(引 込じあん) + むだ口多し せんさく好き 私語 (こそこそ話) 差出口する	残 酷 + むだ口多し せんさく好き 私語 (こそこそ話) 愚 鈍	残 酷 + むだ口多し 私語 (こそこそ話) 瀆 神 喫 煙
1927年	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + 疑 深 い + 私語 (こそこそ話) 差出口する 喫 煙 自瀆行為	残 酷 + 非社会的(引 込じあん) + せんさく好き 私語 (こそこそ話) 差出口する ぐずつたれ	残 酷 + せんさく好き 私語 (こそこそ話)	残 酷 + 私語 (こそこそ話) 喫 煙 瀆 神

+ …… 教師、精神衛生家共に重視するもの
 印なし …… 教師、精神衛生家共に軽視するもの

来すような行動を重視しがちであり、その反面内向的な個人的適応に関する問題行動を軽視する傾向が依然認められる。

然しかかるすれの大きな項目を抽出しての考察は教師の態度の一面をみうるにすぎない。なる程、1951年の精神衛生家の評定列位と小論でとりあげた教師の形式Ⅰの評定列位との列位相関は $\rho=0.20$ と低くなり、両者のすれの大きいことが全般的には物語られているけれども、項目によつては両者に高度の一致がみられるものもあるはずである。かかる一致の度合を検討する企図から、両群が共に最も重大とみなす上位10に挙げている項目と、両群共に最も軽視する下位10項目に評定している行動とを抽出してみると、Table 14の如くかなり多くのものを認めることが出来た。即ち重視する方で一致するものには、全般を通じての「残酷」、一部高校男教師に於ける「疑深い」、小学校女教師に於ける「非社会的（引込じあん）」といった退行的な性格や行動特性があり、両群が共に軽視するものとしては、全般的には「むだ口多し」、「私語（こそこそ話）」、「せんさく好き」が目立ち、一部高校教師に「喫煙」、高校男教師と小学校女教師に於て「差出口する」が挙げられる。

すれの大きいものと比較的一致するものとの検討を通じて、概括的に気付くことは、

①教師と精神衛生家との相関は低いにも拘らず、両群間に一致する項目をかなり認めることが出来る。

②すれが大きい項目の多いという点で高校女教師が目立っている。

③両群の比較的一致する方では、共に重大視する上位での一致を示すものよりも、重視しない下位での一致項目が多い。

④比較的精神衛生家の評定と一致する項目が多いのは、高校男教師と小学校女教師の二つの群に於てである。特に「非社会的」という退行的性格が、小学校女教師に於て重視されるものとして挙げたことは注目してよい。当該項目は他群にあつては重視も軽視もされていないものである。

⑤更に注目されることは、すれの大きい項目としても挙げ、また全時に比較的一致する項目としても抽出されたものに「愚鈍」がある。即ち高校女教師及び小学校男教師にあつては、「愚鈍」が極めて重視されて、精神衛生家の態度と大きなすれを示しているのに反し、同じ「愚鈍」が中学校女教師では精神衛生家の評定と同様に重大でない方に指摘されている。

児童生徒の問題行動の評定を教師に課した結果に基づいて、以上極めて皮相的な考察をなして来たが、これは未だ問題を提示したにすぎないと云えよう。今後更に教職の経験年数などを勘案しての深い分析的考察を試み、第二報告に於てそれを論じようとするものであるが、一応ここで、かかる調査の反省をも含めて、今後考慮すべきいくつかの問題を発展課題としてとりまとめておこうと思う。

V 発展課題

教師の問題行動に対する態度に関する従来の諸研究を通じ、根本的な問題として先ず痛感す

ることは、「精神衛生家が正しく (right), 教師は素朴だ (naive)」(16) というように、精神衛生家の見方をいかにも絶対的な基準であるかの如くに取扱い、それとの比較に於いて教師の態度が間違っているというように論じられ勝ちな点である。勿論心理学的な知見を教師が持つことは大いに要請されるけれども、学級経営の場にいる教師と、個人の精神治療の場に立つ精神衛生家との問題行動の観点には、当然異なるものがあるということを前提にすべきではなかろうか。個人のパーソナリティの混乱よりも、学級のモラルの崩壊の方が教師の心をより強く乱すことは、現実の問題として考えた場合むしろ当然であろう。こうした処にも一般心理学と教育心理学の関係、換言すれば教育心理学の独自性の問題が関連するような気がしてならない。

又従来の研究、特に Schrupp, M. H. & Gjerde, C. M. がなした研究(17)をしらべて感ずることは、教師の児童生徒に対する態度を考究する際、広く教師の社会的経済的背景を考慮に入れる必要があるということである。Wickman, E. K. のなした研究以後 24 年間に、教師の問題行動に対する態度には進歩発達がみられたと Schrupp 達は述べているが、その場合それがただ単に彼等の推定するような、教育心理学書による知識の影響だけでなしに、その間に於て教職が如何なる社会的経済的変動を受けて来たかという観点からの、所謂社会心理学的な考察が更に必要であると思う。勿論このことは結果の考察に関して配慮すべき注意ではあるが。

次に反省されることは調査方法に関連した問題である。50 というような多くの項目をその重大さに応じて品等づけるよう要求された者は、恐らく当該項目に關した行動の生起する可能な事態を思い浮べて反応しようとするであろう。然しそうした事態は種々想起されようから、ますます判断が困難化するだろうと考えられる。従つて、かかる調査研究に於ては、もつと行動の事態を明確に特殊化して行くのでなければ、得られた結果が極めて曖昧な漠然とした判断に終るであろう。(17)

Peck, L. も Wickman, E. K. の調査方法を間接的だと批判し、より直接的に教師に対して、「学級の生徒が何故不適応になつたか」を説明させ、「その生徒にどうしてやつたらよいと思うか」と質問する方が適切だと提案している。而も彼女自身のこの教示による調査の結果では、教師の態度に Wickman に於ける精神衛生家のそれとよく似たものが得られた。従つてこれこそ児童生徒の行動に対する教師の眞の態度を示すものであると彼女は結論づけている(18)が、結果をそのまま受取るわけにいかないにしても、確かに Wickman 式の調査方法の根本的な欠陥を衝くものとして反省させられる。

更に方法上の問題に關係して、Wickman, E. K. の示した行動項目には技術的特殊的意味を持つた用語の含まれていることが反省される。精神衛生家には親しまれていても、かかる用語は教師や両親に対しては、それとは全く別の意味を持つた項目としてうけとられる結果になり、そのことが両群の態度の差に影響してくることを考えておかねばならない。やはり常に、評価の規準は具体的な行動環境の構造特質によつて即事的に決定されるということに注意する必要がある。

従つてこのことから、評定には常に個人差を考慮に入れなければならないという問題が起る。勿論 Wickman, E. K. 自身も彼の調査の結果から、教師の態度には個人差があるとして、いくつかの類型を挙げて説明している(19)わけで、今後本研究の発展もその方向を辿らなければならないことを教えられる。特に従来の研究を見て行く場合注意しなければならないと思うのは、相関係数というような概括的な指標からみれば、諸研究の夫々対象となつた精神衛生家群の間にかなり高い一致度を認め得るけれども、実は項目ごとに分析的に検討していくと、精神衛生家といえども問題行動の見方に関しかなり差異のあるものを見出すことが出来る。(3頁**参照) Watson, G.が「一群の専門家が別の専門家群と一致すると同様に、両親のある群はある専門家達と一致すると解するのが正しいだろう」(20)と述べているのは大いに示唆的である。

なお、次に精神衛生家の態度の分析に直接向けられた Klein, D. B. の批判(21)をみると、精神衛生家達が退行的・内向的な性格や行動を重視しているのは、子供のそうした性格や行動の特徴が、成人になつた時の分裂病(Schizophrenia)に関係があるという理論的な背景に基づいてであると論じている。然し Faris, R. E. L. & Dunham, H. W. (1936) が精神病院の101人の分裂病患者について、彼等の子供時代の人格特性を調査した研究をみると、101人中53名は子供時代の特徴についての充分の資料が得られず、残り48人のうち21名だけが内向的な子供であつて、あとの27名は明白に子供の頃正常な社会性を示していたということが判明している。このことから、Klein, D. B. は何も内気な子供が将来分裂病に陥るという因果関係はない。「内気」だから重大だと評定する以前に、患者の社会的隔離を惹起した原因を一人一人について分析し、「内気」以外の因子が探究さるべきだし、児童生徒の問題行動について云えば、何故内向的であるかということが寧ろ問題だという意味の事例研究を強調する論を主張している。教育心理学的研究は、常に教育の現場に於ける指導・治療への発展を予想すべきものと思うが、この意味からは確に事例研究が必要視されて来るであろう。本研究も一般論より進んで教師の事例研究にまで及ぶべきだと考えている。

なお、児童生徒の問題行動に対する精神衛生家と教師の態度にはずれのあること、教師の態度にも個人差のあることから進んで、このような教師の態度の差異が児童生徒の反応をいかに規定するかについての研究が発展的に要請される(22)という点についても、実証的な究明を続けたいと念じている。

Ⅵ 要 約

最後に一応この報告に於て考察された主要な点を纏めておくならば、次のようになる。

①教師に対して、児童生徒の問題行動を、将来の適応についての重大さと現在の取扱上の困難さとに関し評定させた結果、両者に著しく高い相関が認められた。このことから、教師は取扱上の現実的な判断に基づいて児童生徒の問題行動の重大さを評価しがちであると云える。

②然し両形式の列位の間には、問題行動の項目によつてはかなり大きなずれを示すものがある。そうしたずれの大きい項目は、教師がその取扱いに著しく困難を感じると評定した行動特

性に多く見られる。即ち第Ⅱ形式での列位の上位のものに多い。

③そうした第Ⅱ形式の評定で教師が取扱いの困難を訴え而も第Ⅰ形式とかなりのずれを示す問題行動を検討すると、その中には個人的適応に関する行動特性をかなりみることが出来る。このことから、教師の児童生徒に対する現実的な態度は案外精神衛生家達の態度に通ずるもののあることを感ずる。

④教師の評定を精神衛生家のそれと比較してみると相関は低い。そして両者のずれの大きいものの考察からは、依然として教師は明瞭な非行や攻撃的な態度や学習の進展を阻止するおそれのある行動を重視し、従順な引込思案的内閉的な態度や退行的な行動を軽視する傾向を認めることが出来る。

⑤性別・校種別に考察してみると、高校女教師に於て最もずれが大きい。他の群の間には大差がない。

⑥然し一方、教師と精神衛生家の評定で一致度の高いものもかなり多くとりあげることが出来る。特に上位（重視するもの）の場合より下位（軽視するもの）の方に一致するものを多く認める。この中には消極的に学習の進捗を乱すものも含まれている。

⑦一致の比較的多く見受けられたのは高校男教師と小学校女教師とである。

⑧ずれの大きい方でも、又一致する方でも共に挙つたのは「愚鈍」だけであるが、それが精神衛生家の見方と一致しているのは中学校女教師の場合である。

⑨教師と精神衛生家との比較に於ては、精神衛生家の態度を絶対的基準と見做しがちであるが、それは正しくない。教師独自の立場を考慮に入れる必要があると思う。

⑩精神衛生の専門家の間にも項目によつてはかなりのずれを示すものがある。教師の態度に於ては一層大きい個人差があるはずだから、今後類型的な研究を進める必要が感ぜられる。

⑪この研究には方法上種多の欠陥が反省される。より直接的に教師の態度を把握する方法の考案と、多角的に究明する努力が要請されよう。

(1954. 10. 20)

引用文献

- (1) 依田新：教育心理学の課題。理想，昭和24年，2月，p. 33.
- (2) Wickman, E. K. : Children's Behavior and Teachers' Attitudes. 1928.
- (3) 沢田慶輔：教師と児童の心理。教育心理学講座3（学級社会の心理），pp. 198—203.
- (4) Watson, G. : A Critical Note on Two Attitude Studies. Mental Hygiene, 1933, 17, pp. 59—64.
- (5) Peck, L. : Teachers' Reports of the Problems of Unadjusted School Children. J. of Educ. Psychol., 1935, 26, pp. 123—138.
- (6) Klein, D. B. : Mental Hygiene. 1944, pp. 189—199.
- (7) Wickman, E. K. : op. cit. pp. 119—121.
- (8) Ellis, D. B. & Miller, L. W. : Teachers' Attitudes and Behavior Problems. J. of Educ. Psychol., 1936, 27, pp. 501—511.
- (9) Mitchell, J. C. : A Study of Teachers' and Mental Hygienists' Rating of Certain Behavior Problems of Children. J. of Educ. Research, 1942, 36, pp. 292—307.
- (10) Klein, D. B. : op. cit. p. 193.
- (11) Sparks, J. N. : Teachers' Attitude toward the Behavior Problems of Children. J. of Educ. Psychol., 1952, 43, pp. 284—291.
- (12) Schrupp, M. H. & Gjerde, C. M. : Teacher Growth in Attitudes toward Behavior Problems of Children. J. of Educ. Psychol., 1953, 44, pp. 203—214.
- (13) 葛谷隆正：教師から見た児童生徒の問題行動。教育心理学，第2集，1951，pp. 59—72.
- (14) Sparks, J. N. : op. cit. pp. 286—288.
- (15) Schrupp, M. H. & Gjerde, C. M. : op. cit. p. 207.
- (16) Watson, G. : op. cit. pp. 62—63.
- (17) Klein, D. B. : op. cit. p. 192.
- (18) Klein, D. B. : op. cit. p. 194.
- (19) 沢田慶輔：op. cit. p. 199.
- (20) Klein, D. B. : op. cit. p. 193.
- (21) Klein, D. B. : op. cit. pp. 195—199.
- (22) 沢田慶輔：教師の心理Ⅱ。児童心理，昭和29年，4月，p. 93.